

正宗白鳥

エミール・ツラ

エミール・ゾラ

美術評家時代

一生を奮闘に終ったゾラが、青年時代に食うや食わずの境涯にあり、一生の目的も未だ決定せずして苦んでいた頃、美術の批評をやった事がある。幼少の頃から懇意であった友人にセーザン又という画家があつて新派の画であつた友人にセーザン又という画家があつて新派の画風を發揮していた縁から、ゾラも清新なる青年画家に交わり、美術上の智識もあつた所から、エーベヌマンと
いう雑誌にサロンの批評をした。不思議にも仏国の有名

の作家は、詩人でも歴史家でも小説家でも脚本家でも一生に一度はサロンの書評をするものだ。何れの国、如何なる時代にあつても同じことだが、当時の仏国にても定名ある老大家は新画風を排斥し圧服しようとし、新旧の軋轢は盛んであつた。ゾラは無論新派の味方だ。所謂外光派といつて、後に印象派に進んだ画風を鼓吹しチヨン鬚大家を罵倒した。而して例の如く激烈なる反対を受けた。ゾラという男何に首を突込んでも、屹度反抗されるのが一生の習いであつたので、書評も其の例に洩れぬ。彼れは雑誌の主筆に特約して、十六七回筆を執る筈であ

ったが、七回掲げられたきり中止さるるに至った。初め二回は審査官の罵倒をし其の眼識の旧に失するを嘲り、青年画家マネーの作を排せしを不当とし、三回目には陳列画二千中千八百九十は駄目なりと評し、第四回目にはマネー及び其の画風の為めに弁論し、第五回目にはマネーの「カミール」を称し、ボロンリボー等の過まれる写真派を攻撃した。この評の為に美術界は動揺し、雑誌へ向けて非難の書状雨の如く、かかる批評は直ちに掲載を止めよと云い、妄評なり無礼なりとし、甚しきはゾラに對して決闘状を送るに至った。而して世界の凡ての雑誌

が然るが如く、「エーベーマン」誌は読者の評判を恐れてゾラに書かせなくなり、ゾラは又も生活に困った。此の時ゾラはかくいった「予は何時も圧服されている人を助けるのだ、予は暴言を吐いたかも知れぬがしかし虚言うそは云わなかつた、どちら付かずのお上手は最も嫌いである、」と、この言はゾラの一生の行為を貫いた精神であつて、彼れは如何に貧乏で苦しんだ時でも確信を枉げず、又社会的地位ある者に頭を屈せず、常に弱者の味方であつた。彼れは雑誌を止められて後、其の美術評を纏めて一巻の小冊子としたが、元より売れもしない。そ

ここで考え直して、短篇小説を書いて見ようとした。時に歳二十八。

過渡時代

ゾラは美術評に失敗し、ようやく「フィガロー」に巴里の写生文などを寄稿して生活していたが、貧困甚しく、又自分の前途について確信が生じない。友人バラブレーグに書を与えて、「予は過渡期にあり」といったが、彼は芝居を研究して脚本を作ろうとしていた。既に美術評

者として失敗し、二三の小説をも作つたが、これも失敗した。さらば脚本家として巴里人を征服しようと思つたのである。千八百六十五年に一の喜劇を作つて、オデオン座へ持込んで拒絶されたのに懲りず、六十六年に更に「マデレーヌ」という三幕物を作つて二三の劇場に採用を請うて、何れからも拒絶された。この時ゾラは極度の労働をして月々僅かに三百フランの収入あるに過ぎなかつたが、毎木曜に数人の友人を招いて饗応するを例とし、互に行路難を語り合つていた。この苦境の間に、彼れに一の慰籍を与えたものは、快活なる一婦人で、後にゾラ

夫人となつた者である。この女とは相惚の中であつたといわるるが、元來ゾラはやさしい情のない男らしく、一生嘗て恋などに夢中になることはなかつたようであつて、この女に対する情も、孤衾水の如き三十年の苦みを脱せんすることから起つたのであろう。後に有名な自然派の文士の会合のあり、ツルゲネーフが露国に歸るについて送別会を開いた時、席上恋愛に関して議論湧出し、ゾラは「恋は世人の云う程人間に対して強大の力のあるものじゃない、愛国心も友情も恋に譲らぬ力がある、自分には嘗て恋に熱したこともなく、従つてかかる状態を描

くことは出来ぬ」といい、フローベルやゴンクールも略々ゾラと同感であつて、座中ツルゲネーフ独り綿々なる恋の情緒を充分に描き能うのみだと衆議一決した。かくの如く、ゾラは一生涯恋に関する逸話のないこと、イブセシなどと同じことであるが、中学時代には無邪気な悪戯をしたもので、嘗て田舎の百姓の娘を誘い出して、友人と一緒に唄つたり騒いだりして、娘の親爺に見つけられ、頭から水を打かけられたことがある。

ゾラは新聞の寄稿と脚本に全力をつくしたが、常に悪評にて自分にも殆んど前途の望が見えぬ気がする。そこ

で又小説の方が恋しくなり、脚本を小説に引直して見ると、本屋でも出版し、間もなく再版となった。これに力を得て、更に長篇を作らんと志し、熟慮の結果、彼れが一生の事業たる「ルーゴン、マツカール」二十卷の叢書の端を開いた。仏国写実派の元祖バルザックの「コメデイ、ユーメーヌ」に倣ったのである。

ルーゴン、マツカール叢書（一）

ゾラは当時の社会状態を描かんとした。即ち第二王朝

の墮落せる世相を諸方面より写さんとした。それで彼れが少年時代の科学的傾向はこの叢書に筆を執るに当りて復活し、遺伝の恐るべきことを思い、これを新作の着眼点とした。叢書中に続々写し出すべき一家族は、当時の社会の弊風に染んで、墮落の縁を造るのみならず、祖先以来の遺伝が根本の原因をなすので、ゾラが一生の事業たるこの叢書の特長は境遇と遺伝とを明晰微細に描いたのに存する。この為に彼れは数ヶ月間図書館に籠って、遺伝に関する書物を手当り次第に研究したが、其中で最も強き印象を与えられたのは、左程有名ならぬ科学者プ

ロスパー、ルーカスの『犯罪学』の研究であったそうだ。

千八百六十八年にゾラはこの「家族史」の結構を定め、十二巻には纏めんとした。それで未だ前途の分らぬゾラに対して義侠的に出版を承諾した書肆は、先ず初めの四巻だけは損をしても出版しようとして契約し、月々ゾラに二百フランを与え、ゾラは又年々二巻宛を著わそうと決心した。これで直接の生活難もなく、専心著作に従事されると喜んで、千八百六十九年五月に第一巻「フォーチュン、オブ、ルーゴン」に筆を染め、家族の起原を描き後巻にあらわるる人物の説明に充あてんとした。この時ゾラは

熟慮の上前回の女と結婚を断行したので、後日其の感を述べて曰く『凡ての大事業を成すに結婚は欠くべからざる者、婦人を以て芸術家の頭脳を惑乱し、製作に妨害を与える者となすは、事実反したる空想に過ぎぬ、自分は己れに平和を与え、愛の家庭に閉籠つて、安んじて大作に一生を捧ぐる為に、善良なる婦人を必要とす』と。かくて彼れが選択して結婚した女は、貧しき商人の孤児であつたが、容貌は美しくて伶俐であつた。

結婚後小さい家を借りて、新夫婦と老母と一頭の犬とで引移つたが、母は多病で家事の助けにならず、妻君一

人で凡てを整理し、料理も大抵其の手になった。こんな貧世帯でも、ゾラに取っては多少前途の光明が輝き初めたような気がして、楽しく机に向うことが出来た。

彼れが目的は科学と詩歌とを調和するにあるので、最後まで其の志は変らなかつた。その為に迫害を受け貧困に陥り、嘲笑され誤解され、絶間なく批評家の暴言を受けたが、最初の考は少しも動揺しなかつた。

『予が若しも道德派に従つたならば、かの好評あるマダムボーグリー(ママ)やチャミニー、ラセルタウなどを凌ぐに足る小説を作ることは難くはない』と云つたが、彼は遂に

家庭小説家にも道德小説家にもならなかつた。

ルーゴン、マツカール叢書（二）

さてゾラは漸く大著作に着手しかけたが、好事魔多し、書肆の都合から出版が延期され、ゾラは生活の困難や技倆に対する疑惑から、筆が進まず、悲観に沈むこともあったが、妻君の刺戟助力で、勇気を失墜することを免かれた。されど不運はゾラを追求し、ナポレオン三世がプロシアと戦端を開き、遂に巴里は敵兵の蹂躪する所とな

り、小説などを書いている時でなくなつた。此時ゾラは三十一歳であつたが、寡婦の一人子といふので召集を免かれたのである、しかし寡婦の子で義勇兵となつて出陣した者も多く、ゾラが志願しなかつたのは愛国心の乏しい証拠だと、後日攻撃の材料となり、弁護士はこの時ゾラは貧なる上に妻は病み、母も老い、親戚はなし、もし出軍すれば、妻と母を餓死せしむる恐れがあつたからだと云っている。

兎に角戦争の爲め大打撃を受け、ゾラは巴里を去つて田舎へ移り一時小説中止、小書肆に計り、戦争雑誌を発

刊して、或友人と二人で全誌を書いたが、これは失敗、
堅忍不拔のゾラも重ね重ねの不運で絶望の声を発した、
或人に向つて曰く、『自分は世は末だという感に堪えぬ、
最早世界に文学が存在しようとは思われぬようになつ
た、予は自分が巴里から携えて来た、ラ、クユレーの第
一章の草稿を見ても、何となく古文書でも見るような気
がする、巴里は遠き遠き雲の中に没している、妻あり母
ありながら、これを養うの資を得る道は更にない、どう
しようか、政治界に身を投じようか、あの厭な厭な政界
に入ろうか』と。

翌年戦争が鎮まって、巴里へ帰り叢書の第二巻、ラ、クユレーを雑誌に出しつつ、第一巻の「フォーチュン、オブ、ルーゴン」を出版したが、売行よからず二版を印刷した体にして、其の実初版の売残りを版を変えた丈であつた、其の中、ラ、クユレーが風俗壊乱だといふので検閲官に呼出され訊問を受けたが、これがゾラの作が終生淫靡なりとの評を受けた第一歩である。

戦争前に契約した書肆は破産し、更に他の書肆と叢書出版の契約を結ぶに至つたが、この時も書肆の主人に面会するに衣服がないので、妻君が家具を売って古衣を買

って来て着せた、この契約とて書肆の方から依頼したのではなく、著者が伺候してお願い申したのである、大家ならぬ文士が原稿を売る時の苦心を知ってるものにして、始めて、ゾラの当時の憐れさを察せられよう。

五文豪の会合

ゾラは叢書物を続出し、多少の評判も得ていたが、住居の近かかったため、新進の自然派作家フローベルと往来するに至った。これが縁となり、ドーデー、ゴンク

ル、及び露国より逃げて来たツルゲネーフとも交わり、遂にフローベルの発起で、毎月五文士の会合して晚餐を共にし、互に文学を談ずることとした。この五人は実に十九世紀後半にて抜群の小説家、何れも保守党を圧して清新なる作風を起さんとする人々にて其の会合は自然派の歴史にて忘るべからざる者である。フローベルはこの会合を名けて、『罵倒された作家の会』とした。五人共脚本や小説で、屢々世間から罵倒されていたのである。この会では虚礼は全く廃せられ、フローベルやゾラは上衣を脱いで、時々シャツ一枚になって気焰を吐き、ツ

ルゲネーフは安楽椅子に寝そべってこれを聞く。ゾラの記録によるに、或晩シャトールブリアンの作に就て激論をして、夜の七時から朝の一時までつづいた事がある。フローベルとドーデーは彼れの作を弁護し、ツルゲネーフとゾラはこれを攻撃し、ゴンクールは中立の姿であつた。又或時は婦人や恋愛について談じ、給仕を驚かしたこともあり、議論が尽きなくて、朝三時頃まで、まち 巴里の市を歩きまわって争論したこともある。

この間ゾラは小説を怠らぬのみか、脚本をも全く思い切る能わず、劇場で人気を取らんと野心は压えられな

かったが、この方は失敗つづきであつた。収入は小説だけで充分でないため、雑誌か新聞に論文を書こうとしても、ゾラの政治論は過激だといふので、何処でも歓迎しない、文学批評や小説論もあまりに急進的なので受けが悪い、幸にツルゲネーフが同情して、ゾラを露国の雑誌に紹介し、充分に所見を発表し、又相当の報酬をも受くる道を開いてやった。

かくてゾラは、長篇の小説と、月々の露国通信の外、マルセイユの新聞へ毎日巴里通信を送ることとし、大に奮闘していたが、労働過度の結果、蛮勇の彼れも遂に神

経衰弱に陥り、筆を執ってる間、鼠が側をかけまわったり、鳥が手の上を飛んでるような気がしてならぬと歎じた。その頃は他の文士は同様の感あり、ツルゲネーフも神経の異状を感じ、フローベルは道を歩んでると、後から誰れかつけて来るような気がすると云っていた。しかしゾラは尚屈することなく叢書をつづけ千八百七十五年までに大部の小説十二巻を書き上げ更に『アツソモール』に筆をつけた。ゾラが天下を風靡するのはこれより始まる。

成功の一步

ゾラが文壇の一大勢力となり、最早如何なる批評家も黙殺し能わぬようになったのは、「アツソモール」の作が出てからである。叢書の十三巻目で、巴里の裏面の暗黒極まる所を忌憚なく写したものの。読み行けばよく巴里交際社会の絶間なき題目となつたので、旧作家等は大に恐を抱き、羨望のあまりゾラ反抗を企てた。後進者が頭を持上げると、先進者がこれにケチを付ける例は何処の社会にもあることだ。それでゾラの徳義問題まで引起さ

れ、人格の非難も生じたため、昔からの友人でも気の弱い者共はゾラと疎遠になり出した。が、その代り青年無名の士でゾラにちかづ近く者が出来た。中にも将来有望と目ざされた五人の青年がゾラの徒党として一団を作った、五人とはアレキシス、ユイフン、モーパッサン、ケアード、エンニツクで何れも二十五歳乃至三十歳である。モーパッサンは其師のフローベルの紹介によって近づき、エンニツクはゾラの小説を読んで感服したことを語らんとて紹介なしに訪問した。かくてこの五人は毎土曜の夜ゾラを訪ねて文学を談じ、又ゾラと共に日曜日にフロー

ベルを訪ねて意見を闘わす。温厚なるフローベルは「アツソモール」を以て、多少極端ではないかと注意し、又ゾラが世評起る毎にそれを利用して自説を述べ弁解もするのを見て、あまり自家広告に過ぎはせぬかと眉を顰めた。しかしゾラはこれに答えて云う「予は財産がないから、筆のみで生活せねばならぬゆえ、自分を社会に認めさせ、書物を多く売る必要がある、自分が人を叩きつけて進まなければ、却って自分が踏潰される心配がある」と。この頃のゾラの奮闘は目醒ましいもので、大部の小説の外に、批評をも書き、田舎新聞、露国新聞の通信も

怠らなかつた。

彼れの収人は俄に増加し、田舎に邸宅を造つたが、小説一つ書終る毎に、その利益で或は塔を造り、或は書齋を裝飾して家が著作の歴史をあらわしている、又彼れは美術骨董を好んで、その為に金と時とを費した。しかも屢々贗物を掴まされることがある、こんな道楽についても世話好きの批評家は苦情を云い、下らぬ事に金を費やすよりも、旅行をしたり書物を読んだり或は生活に余裕を残して、濫作を慎んだらよかろうと云う者が多かつた。無論お説の通りだが、ゾラは巴里生活を描くべき叢書に

着手しているのだから仏国以外へ出ても材料は得られぬ。読書をしないと云うのは間違いで、彼れの評論を見てもその読書の量の大なることが分る、但し彼れは古文学を好まず、それは只歴史的に価値あるのみだとしていた。古人を尊んで、ぐずぐずしてるよりも現在と将来とに全心を捧げて活動するのが、その本意で、ゾラの性格から云えば然るべきことだが、骨董道楽は可笑しい。

日本文学電子図書館

エミール・ゾラ

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第7巻、新潮社

昭和42年5月30日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館